中国朝鮮族の民族語に対する言語意識からみるアイデンティティの考察

――延辺大学における質問表調査を通して

趙　南実

要　旨

本論文は、朝鮮語に対する意識を中国朝鮮族の大学生に対し質問表調査を実施し、分析したものである。調査の目的は、以下の二つである。第一は、中国朝鮮族の若者たちには「中国朝鮮族」としてのアイデンティティが強く存在することを実証すること。第二は、中国朝鮮族の歴史、言語、アイデンティティなど民族性に対する意識構造の変化を把握分析することである。そのため以下三つの仮説を立てる。

仮説１．延辺では朝鮮語の機能低下あるいは朝鮮語の使用範囲の縮小化が進行している。

仮説２．朝鮮語に対する継承、発展意識は依然と高い水準にある。

仮説３．延辺の若者には「中国朝鮮族」というアイデンティティが強く存在する。

今回の調査では上記に述べた仮説に対し有意差の結果は得られなかった。しかし、朝鮮族若者の意識構造に関しては、不十分ながらその状況が把握でき、興味深い問題点を発見することができた。朝鮮族はあくまでも中国の少数民族であり、漢民族とは異質であると意識している。例えば、文化、言語、生活習慣、家庭教育、待遇政策、考え方などの面については漢民族と異なることを強く意識している。しかし、祖先、学校教育、宗教、雰囲気などについては強い民族意識が見られなかった。つまり中国朝鮮族は朝鮮民族としての文化的背景の独自性が薄れつつあるといえよう。

キーワード：中国朝鮮族、延辺朝鮮族自治州、民族語、言語意識、アイデンティティ、

序　論

世界には自分の民族語を持っている民族もあり、自分の民族語を喪失した民族もある。民族語はその民族の生命であるといっても決して過言ではない。そのような言語はその民族社会の政治、経済、文化の影響を受けて絶えず変化している。

アイデンティティは一人の人間にとってきわめて大切であり、その形成もきわめて複雑である。それは一人の人間が何者で、どこに属しているか、というその人間に価値を与えるものであり、その形成は歴史、社会、政治、経済、文化などいろんな要素の発達、変容とともに人間の生涯という長期間にわたって成り立つからである。アイデンティティに関する研究は今までどおり、そしてこれからも、特に国際化によって、次第に多民族が入り混じった国へと変貌する、こうした状況の中で更なる発展を遂げていく。

民族アイデンティティは、アイデンティティ研究の最も重要な領域の一つであり、グローバルな社会における民族性の重要性は日々高まっている。それは、民族性を究明することによって、異なる文化を理解することにもつながり、自分の文化をさらに深く認識することにもつながる。また、言語という文化的側面は民族性の形成、あるいは意識構造の形成に大きな影響を及ぼし、文化など諸分野の変化によって人間の意識も絶えず変化していく。人間の意識は何の要素の影響を受け、どのように変化していくか、今後の研究の課題に進めていくために現状を把握する必要があると筆者は思う。

Ⅰ　中国朝鮮族の歴史と現状

１．朝鮮族の歴史

朝鮮族の歴史をたどれば、古くは明時代の末期や清時代の初期に戦争捕虜として連行された人々の子孫がいる。朝鮮北部の農民を中心に移民として増加し始めるのは19世紀後半からである（金東和1992：２；朴昌立1987：８；朴奎燐等1989：１－２）。だが、それ以前の各時代においても戦争や自然災害により、断続的な移住があったことは確かである。現在、彼らのほとんどはすでに漢族を中心とする他の諸民族に同化してしまい、明・清時代に移住した人たちを含め、その足跡を辿ることは極めて困難となっている。

1840年の阿片戦争勃発以来、清政府の鎖国政策に緩みが生じたことに加え、1860年から1869年にかけて朝鮮半島北部で発生した長期にわたる自然災害により、数多くの避難民が今日の鴨緑江や図們江（豆満江）を渡り、あるいはシベリアを経由して後に「南満」、「東満」、「北満」などと呼ばれた地域に移住した。1885年には、清政府が封禁令を廃止し「朝鮮人開墾区域」を設置することによって、さらに多くの朝鮮人が国境を越え中国に渡った。そして20世紀に入ってからは、日本が朝鮮半島を統治する過程において、ますます多くの朝鮮人が中国に移住した。

日本の朝鮮半島における「土地調査事業」（1910～1918）に始まる一連の植民地政策は、農民の土地喪失や貧困化を招来し、彼らの「満州」への移住を力ずくで煽った。

この時期における移住の特徴は、国境地帯の農民だけでなく、朝鮮半島南部とくに慶尚道からの移住民が急増したことや、移住地が「南満」、「北満」地域にまで波及し、至る所に朝鮮人村が形成されたことであった。この時期における移住を仮に「避難型移住」と称すれば、「満州事件」が勃発する1931年から第２次世界大戦が終了する1945年までの間に行われた移住は、日本の朝鮮半島および「満州国」に対する植民地政策に基づく「管理型移住」と言えよう。

中国における朝鮮人移住民の人口は、1931年に約64万人、1939年に約107万人、1944年にはさらに166万人にも達した。その後、日本の敗戦とともに約50万の朝鮮人は故郷の朝鮮半島に引き上げ、100万あまりの朝鮮人は中国に取り残され（玄圭煥1969：168；金東和1992：３）、今日の朝鮮族を形成した（韓景旭1994b：161－165）。

（http : //sangbong-net.hp.infoseek.co.jp/chirus.htm　2005年２月９日検索）

２．延辺朝鮮族自治州

延辺朝鮮族自治洲（以下略称延辺）は中国朝鮮族の主な集住地である。延辺は1952年９月３日に成立した。延辺は中国東北吉林省の東部に位置し、ロシア、北朝鮮と境を接している。三国境界になっている都市は琿春市である。ここは距離的に言えば、中国から北朝鮮、ロシア、韓国、日本まで一番近い所で、日本海まで５km しか離れていない。総面積は42,700平方キロメートルである。1990年の第４次国勢調査の資料によれば、延辺内には漢族と朝鮮族をはじめとする16の民族が居住しており、総人口は207万9700人となっている。民族別人口では、漢族の人口が最も多く全体の57.08%を占め、朝鮮族はその次で39.5%を占めている。その次は満族、回族、モンゴル族、壮族などの少数民族がいる。そして延辺は６市２県を管理している。６市というのは延吉市、琿春市、図門市、敦化市、龍井市、和龍市で、２県とは安図県と汪清県である。これらの地域は稲作が盛んに行われていることから、古くから「水稲之郷」と呼ばれている。朝鮮族はまた、中国の東北地区において最も早くから稲作を始めた民族と言われている。

朝鮮族は現在、多くの地域において漢族と混住しており、日常生活において漢族文化の影響をかなり受けている。だが、その中には他のどの民族にも負けないほど強い民族意識が潜在しており、生活慣習はもちろんのこと、民族言語や朝鮮語文字もさらに発展してきた。そして祖先伝来の生活様式を保ち続けながら独自の文化を高度に発展させ、粘り強く異民族社会を生き続けている。

３．朝鮮族文化の発展

第２次世界大戦が終了することによって、中国東北地区の朝鮮族はようやく日本の植民地支配から解放された。その後まもなく、延辺や牡丹江などの解放区では、朝鮮語の新聞や雑誌が発行され、朝鮮族のラジオ局や出版社、医療専門学校まで設立され

るにいたった。そして1949年４月には、文学・理学・医学・農学など４つの学部からなる朝鮮族総合大学―延辺大学が創設された。

現在中国には、朝鮮族のための大学が５つと専門学校（「中専」という）が９つあるほか、朝鮮族が居住するほとんどの地域において、朝鮮族小・中・高校が設立されている。また、識字率や就学率の面では、全国の平均値を大きく上回っており、1987年の統計資料によると、12歳以上の人口における非識字率は、朝鮮族が7.2％で、漢族が24.6％、チベット族が71.6％となっている。さらに、人口千人ごとに占める大学以上の学歴所持者は、朝鮮族に44.1人、漢族に10.8人、そして少数民族の全国平均が６人となっている（金炳浩1992：153）。

1950年代には、『延辺文芸』、『長白山』、『阿里郎』（アリラン）などの朝鮮語による大型文芸雑誌が相次いで発行されたほか、作家協会、戯曲家協会、音楽家協会、舞踏家協会、美術家協会など９つの芸術家協会からなる巨大な「延辺文芸連盟」が誕生した。

朝鮮族文化の研究機関としては、「延辺大学朝鮮族言語文学研究所」、「北京大学朝鮮族文化研究所」、「延辺社会科学院」、「延辺芸術学校」などがある。そのほかにも、朝鮮族独自の図書館、博物館、民族博物館、美術館、新聞社（『延辺日報』、『吉林朝鮮文報』、『黒龍江朝鮮文報』、『遼寧朝鮮文報』、『中国朝鮮族少年報』）、出版社（「延辺人民出版社」、「黒龍江朝鮮民族出版社」、「遼寧民族出版社」、「東北朝鮮族教育出版社」、「延辺大学出版社」）、雑誌社（『天池』、『長白山』、『青年生活』、『延辺婦女』、『大衆科学』、『中国朝鮮語文』、『文学と芸術』など20種類以上の刊行物）、テレビ局（「延辺電視台」）、ラジオ局（「延辺広播電台」）があり、高いレベルの民族文化システムを内外に誇示するにいたった（韓景旭1994b：165－170）。

Ⅱ　Baumeister のアイデンティティ理論

Baumeister はアイデンティティを定義する規準、アイデンティティの機能的な側面の二つのレベルを取り出している。

図２－１：アイデンティティ概念：成分と構造

１．定義の規準
　１）時間的な連続性
　２）他者からの分化
２．機能的側面
　１）対人的なアイデンティティ（役割など）
　２）潜在的な可能性
　３）価値や重要度の構造

1．定義の規準

1）時間的な連続性：連続性は一貫性と同じく、自己意識が時間的な経過にもかかわらず相対的に変化しないことを意味している。昨日の自分は今日の自分であり、また自意識を獲得してから今日まで、自分の存在が一貫していることは疑っていない。また、連続性や一貫性は将来展望としても存在している。自己の存在の連続性が信頼されることによって将来に対するさまざまな展望を持つことが可能となる。将来に対しては、あやふやであるにもかかわらず、これを一種の確信としているのが普段の私たちの生活である。

このようにアイデンティティは鮮明な自己意識を構成要素としている。これは個人内における時間性ないし歴史性の安定度といってよい。個人の歴史を一貫性のあるものとして受け取っている人は、アイデンティティの確固とした一側面を得ているということができよう。この個人内の時間性や歴史性はまた、自分を取り巻く周囲や社会といった人間的な構成要素をも一貫性と持続性のあるものとして信じている。またさらに、自分を取り巻く物理的な環境も比較的一貫性と連続性のあるものとして信じている。

一貫性と連続性のテーマはこのように、個人内的な世界、周囲の人間環境、周囲の物理的環境の３つから成立していて、私たちはこれらをほとんど無意識的に確信している。この３つのどの側面が揺らいでも、私たちのアイデンティティは揺らぐことになるのである。

2）他者からの分化：分化というのは自己と他者とを分別する、識別する、別な存在として意識することを意味している。他者と自己とが区別がつかないとき、私たちは自分自身ではありえない。しかし、反対に自分の自分らしさは何かと問われると、なかなか「これが自分である」ということも答えにくいところがある。他者を排除しないで他者との共通点を認めながらなおかつ自分らしさを見出している状態を分化している状態ということができる。そしてこの分化は自分らしさや自己意識を構成要素とするアイデンティティとしては欠くことのできないものである。

2．機能的側面

1）対人的なアイデンティティ：第１に、鮮明なアイデンティティを持ちえていることは、自己の個人としての価値や重要度の階層が形成されていることを意味している。したがって、方向性を持った生活や行動をとることができやすいと考えられる。第２に、他者との分化度が高いことは、他者との関係を持ちやすくすると考えることができる。ペルソナの形成が自己の属する社会的な対人関係的な文化の枠に従って適度に形成されていることによって、対人的規範を逸脱しないで関係を維持していくことができる。第３に、ライフサイクル上のさまざまな出来事に対して、その経験がたとえ

苦痛のものであっても、その経験を排除したり否認したりすることなく統合する方向に働くと考えられる。それは自己の基本的な経験を重視することからくるのである。このことによって、個人は自己の潜在可能性を発揮する機会が多くなる。

２）潜在的な可能性：潜在能力や自己が充分に機能していることは何によって知ることが出来るのだろうか。内的には充実感を持ちえていること、外的には社会的、対人的に何らかの貢献をしている状態を示していることがあげられるだろう。生き方の方向性は潜在能力が発揮されているとき無意識的に自然に決まっていく。いかなる理由にせよ外的な圧力による決定は、潜在能力の発現が押さえられる可能性が高い。アイデンティティの形成は自己の潜在能力に沿った形で自己の生き方を模索するものであり、したがって、潜在能力が発揮される可能性を高めるだろう。

３）価値や重要度の構造：アイデンティティの形成ということは、自己内部のさまざまな側面を含む経験が自己意識によって統合されていることを意味する。精神分析が発見したように、超自我の形成の中には社会的な規範や自我理論が含まれるが、それらはすべて内的価値観の統合のテーマであるということができる。その中で、生き方の意味につながる倫理観、宗教観、社会的生き方を規定する政治観、職業観、道徳観、個人的生き方を規定する幸福観、美的感覚などはアイデンティティに属する価値観の構成要素であると考えることができる。（鑪、山本、宮下、1996年：11－20）

Ⅲ　調査地の概要と調査の方法

１．調査地の概要

延辺大学は延辺の首都延吉市に位置している。1949年３月、全国初の少数民族大学として設立し、1959年から他民族の学生も募集し、教授用語を朝鮮語から漢語に切り替えた。文化大革命時期には「民族分裂主義を実施する黒い拠点」として激しく攻撃された。1995年延辺大学は吉林省重点総合制大学に入り、1996年、延辺大学、延辺医学院、延辺農学院、延辺師範高等専門学校、吉林芸術学院延辺分院など延辺５つの高等教育学校が正式に新しく合併した。同年の10月、中国初の私立大学の延辺科技大学も延辺大学と合併した。そして12月には国家「211プロジェクト」部門審査に合格し、21世紀中国の重点大学100校の内の一校となった。2001年には吉林省人民政府教育部から西部開発重点学校に指定された。

現在大学には、経済管理学院、法学院、師範学院、体育学院、人文社会科学学院、朝鮮―韓国学学院、漢語言文文化学院、外国語学院、芸術学院、理学院、工学院、農学院、基礎医学院、臨床医学院、薬学院、中医学院、看護学院、科学技術学院、社会人教育通信学院など19の学部、経済学、法学、教育学、文学、歴史学、理学、工学、農学、医学、管理学など11の学科、68の専攻、48の修士課程、４の博士課程が設けて

ある。そして、校内には７つの省重点学課と東北アジア研究院、民族問題研究院、長白山天然資源保護及び開発研究院等の55の研究機関が備えられている。そして図書館、福祉病院、出版社も備えられている。現在学生は22,458人が在籍しており、その中には、博士課程に135人、修士課程に1,862人、全日制四年学部生が16,137人、通信教育を受けている学生が3,646人、外国人留学生545人がいる。

延辺は中国東北地区の中で文化教育事業が発達している地区である。標準語の普及率が高く、延辺大学の対外中国語教学研究センターは国家中国語教学事務室より第一に許可を得た機関であり、1999年には国家華僑事務室の許可を得て華文教育基地を設立した。国内外においても延辺大学は中国語研究、教育に高い威信を持っている。延辺大学は朝鮮（韓国）問題を研究している重点大学であり、学校の朝鮮（韓国）言語文学学科は国内唯一の学科である。（http : //www.china.co.jp/jilin/yanbian-u/gaiyou.html　2005年12月６日検索）

２．調査目的

本研究は次の三つの仮説を検討することと④番目の項目を把握することを目的としている。

①中国朝鮮族は中国語と朝鮮語併用の言語環境下、家庭、社会などの状況の変化によって言語を使い分ける。

②朝鮮語に対する保持、継承意識は依然と高い水準にある。

③中国朝鮮族には「中国朝鮮族」というアイデンティティが一つのカテゴリとして定着している。

④中国朝鮮族は漢民族とどのような面で相違点を感じているか。

３．質問表調査の概要

調査は、延辺の延吉市に位置している「延辺大学」で、2005年７月に行った。対象者は、延辺大学外国語学部日本語専攻25人、漢語言文文化学部40人である。被調査者の属性は、学生全員朝鮮族で、年齢は20～22歳（日本と異なり延辺では数え年で年齢を数えるのが一般的である）である。

調査方法は、作成した質問表調査依頼状を両学院の責任者に提出し、質問表調査に対する許可を受けた上で、担任の先生に質問表を渡す。担任の先生から学生に質問表を配布し、授業時間に回答してもらい、回収する。

配布部数は計で65部、回収部数は日本語専攻15部（回収率60％）、漢語言文文化学部38部（回収率95％）で計53部（回収率81.5％）である。

Ⅳ　調査の分析と考察

１．朝鮮語能力について

朝鮮語能力に関しては、現在の朝鮮語能力に対する自己評価、朝鮮語習得に対する意識、朝鮮語と将来との関係などを問うた。

林成虎氏（2004）から中国朝鮮族の母語能力が低下しているという結果が得られた。本調査は、朝鮮語能力の４技能の「読み」、「書き」、「話し」、「聞き」について調べたものではない。生活、学習、社会的交際を行う際、不便を感じるかどうかのレベルで自己評価してもらった。調査の結果は次のようである。

まず、自分の朝鮮語能力に対して自己評価してもらったところ、自分の朝鮮語能力に満足していない学生が19人で35.85％、よく分からないと答えた人が11人で20.75％、満足している学生が53人中23人で43.40％を占めていた。

任栄哲氏（1993）「在日・在米韓国人および韓国人の言語生活の実態」は中国人朝鮮族の朝鮮語能力について言及したことがある。当時の中国朝鮮族の言語能力に対する意識調査では世代を問わず、90％を上回る高い比率の結果を得たという。それに比べれば今回の結果は若者に限っているものの、予想意外に低かった。

言語能力を評価する際、どのような要素が影響しているかを知るために、家庭用語、日常用語、公用語との関係を調べた。その結果、相関係数が各 r＝0.39　0.17　0.29 となった。相関係数が0.5未満で低い関わりを示したものの、係数の大小が家庭用語、公用語、日常用語の順になっていることから、民族語能力を評価する際に、家庭用語が公用語、日常用語より優先的に考慮の要素になるのではないかと思われる。

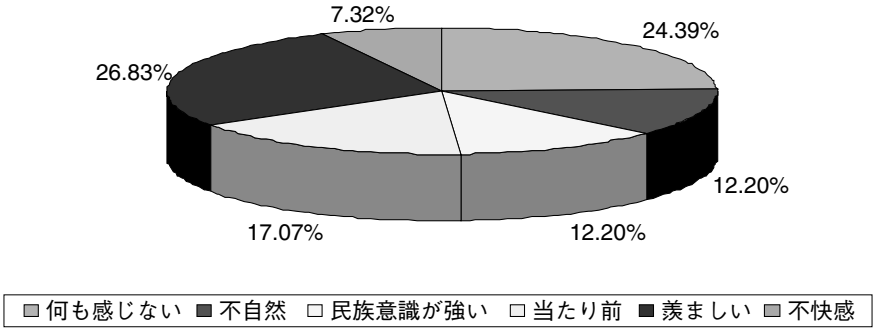
次は朝鮮語に対する意識調査である。ここでは主に、朝鮮語に対する評価、朝鮮語がよくできる人に対する印象など二つの問題について問うた。結果、

「朝鮮語ができると生活上有利だと思うか」という質問に対して、６割の学生が有利だと答え、４割の学生が「反対」、「どちらともいえない」を選び、予想以外の結果となった。延辺においての朝鮮語の威信も無くなりつつあるといわざるを得ない。近年来、延辺の人口構成が変わり、漢民族の比率が著しく高くなっている。今日では延辺において朝鮮語しかできなければ生活上不便だということになる。このままだと、延辺の老年層は生活上不便を感じることは言うまでもなく、子供たちの中国語への同化が加速するであろう。さらに、「朝鮮語が将来にプラスになると思うか」という質問に対して、77％の学生はプラスになると答えたが、23％の学生が反対あるいは分からないと答えた。朝鮮語の将来も決して楽観的ではないことがいえよう。そして賛成以外の回答項目を選んだ学生たちが朝鮮語に対してどういう意識を持っているかについては今後の研究課題としてさらに詳しく検討すべき点である。

一方、「中国に住みながら朝鮮語ができなくてはいけないか」という質問に対して、27.5%の学生ができなくてもいいと「反対」し、25.5%の学生が「分からない」と、47%の学生が習うべきだと「賛成」した。朝鮮語が将来にプラスになるだろうという意識が大きい比率を占めているものの、いざ本人が習得という現実の問題になると、低い比率を示している。それは、考えていることと現実のずれを現しているといってもいい。

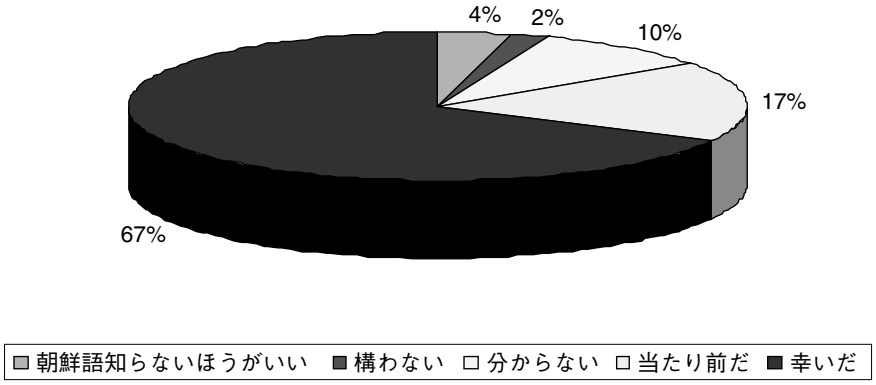
「韓国語が上手な人に対してどのような印象を持っていますか」という質問に対して、結果、

図４－１：中国朝鮮族の韓国語が上手な人に対するイメージ



「うらやましい」「民族意識が強い」というプラス評価をしている４割、「かえって不自然だ」「よい感じがしない」というマイナス評価が２割、「何も感じない」「当たり前だ」と答えた人が４割の比率であった。これに比べて、中国朝鮮族の朝鮮語に対する感情を見ると、

図４－２：中国朝鮮族の朝鮮語に対する感情



知らないほうがいいと答えた学生が２人（４%）、知っても知らなくても構わないと答えた学生が１人（２%）、分からないと答えた学生が５人（10%）、できて当たり前だと答えた人が９人（17%）、できて幸いで誇りと思っていると答えた人が35人

（67%）を占めている。

図４－１と図４－２を比べると、明らかに回答の傾向が異なる。つまり、朝鮮語と韓国語は同じ言語であるものの、長い歴史の中で、その言語に対する意識が変わっている。朝鮮語は中国朝鮮族という集団の使用言語として、中国朝鮮族という仲間意識のシンボルとして使われている。韓国語は大韓民族の言語として、大韓民族という仲間意識のシンボルとして使われている言語であると意識している。言語に対する意識、あるいは感情、評価には、言語の先進性、後進性に関係なく自らのアイデンティティが影響するのである。

そして、今回の調査は中国朝鮮族若者すべてを代表するものとは言えない。しかし、自分の民族語に対して誇りと思う学生が高い比率を占めているとはいえ、自分の民族語に対してコンプレックス、あるいは劣等感を感じている学生の比率も決して無視できない。これらも今後の課題としたい。

任栄哲氏（1993）の研究では、在日、在米韓国人の場合、言語能力についての意識は老年層、高学歴ほど強かった。今後の研究においては、そのような要素が中国朝鮮族の場合にも言えるかどうか、そして地域別、階層別、世代別などの諸要素との組み合わせから中国朝鮮族の朝鮮語能力、その変化について研究を継続していきたい。

２．朝鮮語の伝承意識について

朝鮮語を習うかどうかということと朝鮮語を習わせたいかどうかは別問題である。自分は朝鮮語が話せないが、次世代に朝鮮語を習得させようという強い伝承意識は、その人の中国朝鮮族というアイデンティティ形成に重要な要素であり、高く評価すべきである。そして何より伝承意識が欠ければ民族文化はいつか無くなる。そこで、中国朝鮮族の朝鮮語の伝承意識を調べるために、次のような問題を問うた。

問題：あなたは将来、自分のお子さんやお孫さんなどの若い世代に朝鮮語を習わせることについてどのように考えますか。

１、とても反対２、反対３、どちらとも言えない４、賛成５、とても賛成

この問いに対して、習わせると賛成した学生が53人中46人で86.8%という高い比率を得た。同じ問題について、任栄哲氏（1993）の調査結果は75.8%であり、10年以上経っている今も、中国朝鮮族の朝鮮語への伝承意識は依然と高く、今後の朝鮮語の発展に期待できるのではないかと思う。一方、反対とどちらとも言えないと答えた13.2%の若者に対して、10年後、20年後の中国朝鮮族の継承者を教育する力量としては今後も注目すべきである。

３．外国語に対する意識について

今日外国語の習得は教養ともつながり、力ともつながる。就職、研究、交流、技術、情報、とにかく社会のいろんな分野は外国語の能力を求めている。そして最近では社

会に適応するためにも外国語習得は欠かせないといってもいい。

中国朝鮮族は歴史的に日本語と密接な関係を持ち、今まで日本語教育に力を入れ、大きい成果をあげている。しかし、改革開放以来、世界各国の中国への進出とともに、特に近年、中国朝鮮族の日本語習得によるメリットも、中国においてのチャンスも少なくなり、活躍の範囲も狭くなっている。

2004年、中国国内における、「中国大学生人気企業ランキング50社」を見ると、18社が中国国内企業で、32社が外資企業である。そのうち上位10社は次のようである。

1位：海爾（ハイアール）	6位：聯想
2位：IBM	7位：華為、
3位：P&G、	8位：GE、
4位：中国移動（チャイナモバイル）	9位：シーメンス、
5位：マイクロソフト、	10位：中国電信（チャイナテレコム）

中国の国内企業が半分を占めており、大学生の人気が外資系だけに留まらないことがわかる。日本企業は50社入りしたのはソニーが26位、松下が46位という結果である（中華英才網：http : //www.chinahr.com/promotion/investigate/2004）。

そこで、中国朝鮮族の外国語意識について調べるために、次の問題を設け、自由回答してもらった。

問題：外国語学習のとき一番学びたい外国語は何語ですか。

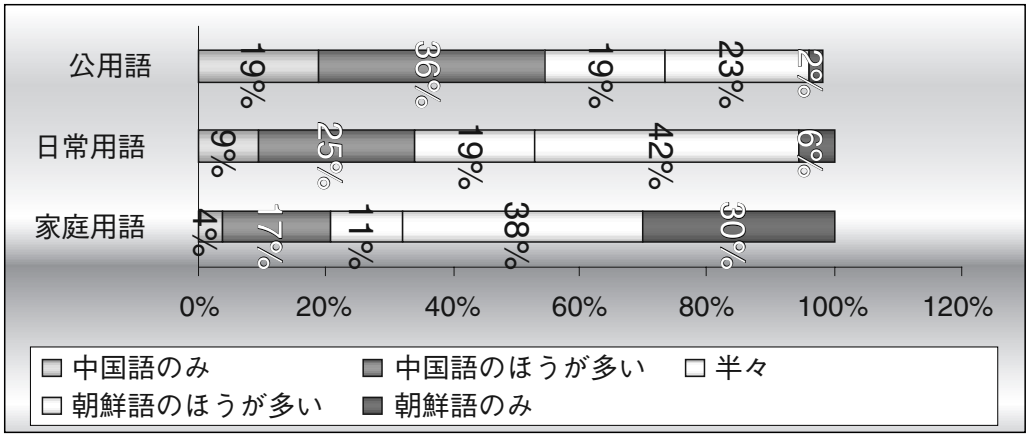
この問いに対して、回答者44人のうち、英語が34（77.3%）人、フランス語が4（9.1%）人、日本語が4人（9.1%）、ドイツ語が2（4.5%）人である。英語が圧倒的に高い割合を占めているのがはっきり分かる。

そして任栄哲氏（1993）の研究では、当時22.5%の中国朝鮮族が中国語に外国語認識を持っていたと述べている。これは非常に興味深い問題なので今後、中国朝鮮族の中国語に対する認識、外国語と思っているかどうかも調査項目の一つにしたい。

4．中国朝鮮族の二言語併用生活における言語の使い分けについて

今回の調査では、被調査者本人が現在家庭、日常生活、公的場においての言語の使い分けについて調べた。資料の基いて分散分析を行った結果有意差は得られなかった。しかし図4－3に見られるように、中国朝鮮族は状況の変化によって、言語を使い分けている。つまり、家庭内では朝鮮語のほうが圧倒的に多く使われ、社会に進出して公的な場所においては、朝鮮語の使用頻度が少なくなり、代わりに公用語である中国語の使用頻度が増えている。詳しくは、家庭内で家族と話すときは朝鮮語を主に使っている。そして家庭を出て友達と喋るとか買い物をするなどインフォーマルなときも朝鮮語を多く使い、中国語も増えていく傾向にある。しかし、発表したり、演説したり、会議に参加したりするときのフォーマルな場面になると逆に中国語が圧倒的地位を占めている。その原因は何だろう。

図４－３：中国朝鮮族の二言語併用環境における言語の使い分け



①延辺地域における朝鮮族人口のマイナス成長、他方からの在住漢族の増加によって生活環境に変化（言語共同体の人口の変化）が起きている。②中国の言語政策よるもので、中国では初等教育の段階から中国語を共通語として習得しなければならない。③中国を舞台としてこれから活躍し、出世するには、高度の中国語レベルが求められている。④延辺地域の経済的沈滞によって、若者たちの活躍場がなくなり、経済が活性化している大都市、沿海都市に出かけざるを得ない。しかし、朝鮮語で活躍できる市場が狭く、これから中国における朝鮮語のメリットが少ない。⑤現代の若者は朝鮮民族としてのアイデンティティを持ちながらもまずは中国人としてのアイデンティティが優先している。⑥朝鮮語をはじめとする朝鮮民族文化にかかわる知識の習得、情報の獲得のチャンスが極めて少ない。新聞、雑誌、書籍、マスコミ、さらに何でも自由にアクセスできる情報化社会、朝鮮民族は中国語と中国文化に囲まれている。

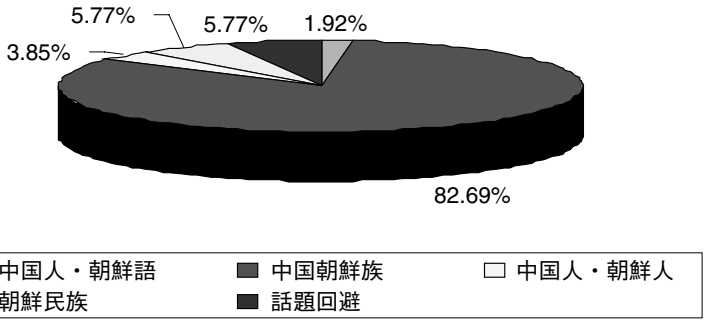
このように、社会、政治、経済、文化すべてにおいて中国語と朝鮮語は優勢と劣勢の地位になっており、このような状況は今後も加速するであろう。

５．中国朝鮮族のアイデンティティについて

今回の調査において中国朝鮮族若者のアイデンティティについては予想通りの結果を得た。図４－４はその結果を表している。

中国朝鮮族は現在、多くの漢族と混在し、飲食や居住など日常生活で漢族の影響を大いに受けている。しかし、朝鮮族の中には他のいかなる民族に負けないほどの強い民族意識が潜在し、風俗習慣や言語・文字などに見られる民族意識が今でも高度に保たれている。このような特殊な民族意識を形成する要因としては、①中国朝鮮族は自分たちの母体・祖先を近い国境を置いて有しており、その連携は長い歴史の中で危機に陥った時代もあったものの絶えず続けてきたことがあげられよう。②朝鮮族は数ある中国の少数民族の中でも、最も教育水準が高いことで知られている。子弟に教育を

図４－４：中国朝鮮族とアイデンティティ



授けることは朝鮮の古くからの伝統である。中国東北部には以前から朝鮮族小学校、初等中学といった教育機関が存在し、朝鮮語で授業が行われる。1949年には朝鮮民族のための研究機関、最高学府として延辺大学が開校された。中国の朝鮮族は高い民族意識を持って民族の文化精神を保持、継承、進展してきた。これが第二の理由である。③一方、朝鮮族は特殊な民族意識を有しつつも中国人としてのアイデンティティを強く持つ。朝鮮族にとって、「祖国」や「わが国」といえばそれは中国を指す言葉であり、国籍上の国（中国）に対してより深い感情を持っている。そして日本の「在日韓国・朝鮮人」とは違い、「朝鮮族」の意識においては第一に「中国人」であることが先行し、そして第二に「朝鮮族」として自らをアイデンティファイする場合が多い。中国の朝鮮族に別の呼称を当てる場合、「朝鮮・韓国系中国人」と呼ぶよりむしろ「中国朝鮮族」と呼ぶのが妥当である。つまり、「在日韓国・朝鮮人」といった場合は、彼らが居住国の国籍を持っていないため、その身分はあくまでも「よそ者」ということになる。それに対し、「中国朝鮮族」といった場合には、朝鮮半島の住民と国籍の上で区別されるほかに、漢族など同国のほかの民族からも区別されることとなる。

以上の中国朝鮮族若者のアイデンティティに関する考察を経て、アイデンティティの問題が社会環境や歴史的・時代的な変動によって影響を受けたり、新しい問題を生んだりしてきたことが分かり、Baumeister のアイデンティティ理論を裏つける研究の一環として今後さらに続けていく価値があると思う。

結論と今後の課題

１．結論

本論文は国際社会適応を人間、文化に注目しつつ総合的な観点から見ることを意図した。つまり、異なった文化の存在、あるいは異なった文化に生きる時代を意識しながら、自文化への興味、理解を深め、広げていくことを第一の目的とした。というのは、自文化への認識、理解がなければ自分の文化を他人に知らせ、広げていくことも

もちろん、異なる文化について知ること、理解することもできないからである。

第二に、異文化問題といえば、国際間のことというふうに考えがちである。それだけではなく自分の国における異文化、すなわち世代間の異文化、地域による文化の違い、言葉の違い、あるいは民族の違いなど、自分の国の異文化問題も含めて異文化という問題を考えていきたい。

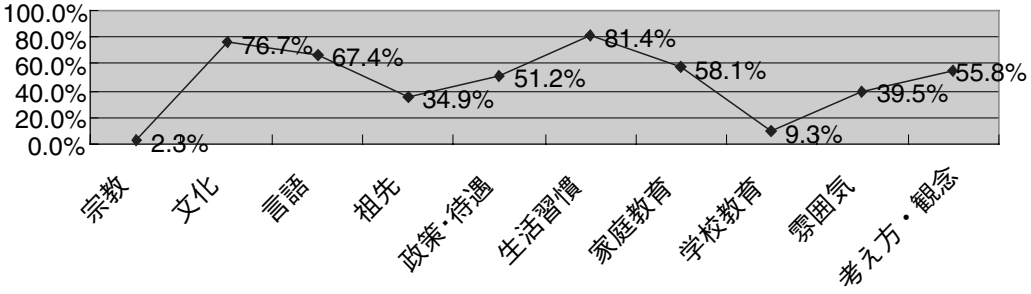
第三に、何のための異文化理解か。情報化社会に生きるため著しく変化している社会に適応しなければならない。人間はよく自分の考え方、価値観、感覚ですべてを規定しがちであるが、このような姿勢はもう通用できない。異文化理解は異なった文化に対しての受容、許容そして新しいものへの創造ともつながる力をつけてくれるからである。以上の趣旨に基づき、目的の第一歩として行ったのが今回の調査である。

今回の調査の中には、たくさんの問題点が存在している。たとえば、理論的枠組みにおいては中国の他の少数民族について言及していないことであり、深く反省すべきである。また調査実行においては調査計画、調査項目、質問表作成、統計的データ処理及び分析などの面に不備、不足が生じた。これが結局調査の成敗につながったといわざるを得ない。今回の経験を踏まえ、今度更に一層高いレベルへの挑戦に役立てるよう、問題点をしっかり解析する必要がある。

2．今後の課題

今後の研究課題の方向性をつかめるため、中国朝鮮族が自分たちと漢民族とどういう面で相違点を感じているかという質問を設け回答してもらった。その結果

図５－１：　中国朝鮮族が漢民族と違うと思われているところ



中国朝鮮族は文化、言語、生活習慣、家庭教育、考え方といった面で高い比率で漢民族と違いを感じていること、そして宗教、祖先に対する意識が薄くなっていることが分かった。さらに、学校教育については低い比率を示しているが、これは中国語による教授用語の普及、漢民族の教育システムとほぼ同じ教育を行っているからであろう。このような学校教育システム、家庭教育による民族の伝統文化、風俗、慣習の保持と継承によって今日の中国朝鮮族の若者のアイデンティティが形成されたのである。

次回の調査では、中国朝鮮族の地域、年齢、学歴、職業、社会階層、性別、世代に

よるアイデンティティについて調査を行い、中国朝鮮族のアイデンティティの発生、変容、確立について詳細にかつ広範に研究を行いたい。また、中国の社会問題として民族問題は無視できない大きな課題である。例えば、新疆ウイグル自治区の分離独立運動、チベットにおける宗教弾圧抵抗運動など鋭敏な問題が潜んでいる。そして近年、モンゴルは著しく発展し、教育レベルは朝鮮族を上回っている。これらの事例を含めて今後はチベット族、モンゴル族、ウイグル族などの中国における他の少数民族の社会問題をも研究分析する。それによって、各民族のアイデンティティを窺い知ることが出来るのみならず、朝鮮族との比較文化社会研究が可能である。これらの研究は「自文化」、「個人探求」というミクロの問題を、カルチャーショック・メカニズム、国際社会適応というマクロの視点から究明することを可能にする。それは、とりもなおさず、マクロおよびミクロ両者の問題は、相互に影響し、同時に相互に進展するいわば相関関係にあるということに他ならないのである。

＜参考文献＞

任　栄哲、1993年、『在日・在米韓国人および韓国人の言語生活の実態』

インターカルチャ研究所、2001年、『世界“民族・宗教問題”小辞典』、日本文芸社

真田　信治、渋谷　勝巳、陣内　正敬、杉戸　清樹、2000年、『社会言語学』

真田　信治、生越　直樹、任　榮哲編、2005年、『在日コリアンの言語相』、和泉書院

鈴木　孝夫著、1987年、『ことばの社会学』、新潮社

鑪　幹八郎、宮下　一博、岡本　裕子編、1996年、『アイデンティティ研究の展望 I』、ナカニシヤ

田中克彦著、2002年、『ことばと国家』、岩波新書

豊田　国夫著、1964年、『民族と言語の問題―言語政策の課題とその考察』、錦正社

中島　和子著、2001年、『バイリンガル教育の方法―12歳までに親と教師ができること』、アルク

西尾　実、1970年、『言語生活の探求－ことばの研究における対象と方法』

山本　雅代、1999年『バイリンガル―その実像と問題点』

森　亘著者代表、1988年、『異文化への理解』、東京大学出版会

林　成虎著、「在中国朝鮮族の母語能力の低下」、2004年、『日本研究』、中央大学校日本研究所

『2000年中国人権事業の進展』、国務院白書第六部分

URL

サンボン・ネットホームページ：

「中国朝鮮族」－http : //sangbong-net.hp.infoseek.co.jp/chirus.htm

朝鮮族ネット（中国の朝鮮族に関するニュースポータルサイト）：

http : //www.searchnavi.com/~hp/chosenzoku/gaiyo.htm

富山大学人文学部ホームページ：社会学文献データベースリンク集 http : //www.hmt.toyama-u.ac.jp/socio/lab/

延辺・朝鮮族関係リンス集：

http : //members.jcom.home.ne.jp/yanbian/date01/link03.htm

中国留学網：http : //www.cscse.edu.cu

天池クラブ：www.tianchinet.com

http : //www.tianchinet.com/document/symposium/jibenbaogao.html
フリー百科事典：http : //ja.wikipedia.org/wiki/
中華英才網ホームページ：
http : //www.chinahr.com/promotion/investigate/2004